

第2回青森県人づくり戦略推進会議の概要

概要

- (1) 日時 平成20年5月28日(水) 13:45~15:20
- (2) 場所 ラ・プラス青い森 2階 「メープル」(青森市中央1丁目11-18)
- (3) 出席者 青森県商工会議所連合会(青森商工会議所中小企業相談所長 道川 浩治氏)
青森県中小企業団体中央会(副会長・専務理事 大河原 隆氏)
社団法人 青森県観光連盟(理事 田中 久美子氏)
青森県漁業協同組合連合会(総務部長 蛭名 正充氏)
社団法人 青森県医師会(常任理事 町田 祐子氏)
社会福祉法人 青森県社会福祉協議会(経営部長 野沢 春男氏)
社団法人 青森県建設業協会(事務局次長 山本 洋一氏)
青森県小学校長会(青森市立千刈小学校長 池田 好明氏)
青森県中学校長会(会長 山田 卓氏)
青森県高等学校長協会(就職対策委員会副委員長 福士 有一氏)
国立大学法人 弘前大学(理事・副学長 加藤 陽治氏)
青森公立大学(学長 佐々木 恒男氏)
青森県PTA連合会(母親委員会委員長 野田 継子氏)
社団法人 青森県文化振興会議(専務理事 鈴木 廣氏)
財団法人 青森県体育協会(理事長 磯野 静久氏)
特定非営利活動法人 あおもりNPOサポートセンター(理事長 田中 弘子氏)
特定非営利活動法人 NPO推進青森会議(理事長 中村 年春氏)
青森県教育委員会(田村教育長)
青森県(三村知事)

(青森県農業協同組合中央会、社団法人青森県銀行協会、青森県私立幼稚園連合会、青森県私立中学高等学校長協会、独立行政法人国立高等専門学校機構八戸工業高等専門学校、青森県市長会、青森県町村会が欠席)

[基調講演講師]

NPO法人JGTS(ジュニア・グローバル・トレーニング・スクール)理事長
青森市新町商店街振興組合青年部長
株式会社成田本店総務部長

工藤 健氏

第1部

1 基調講演

「ジュニア・グローバル・トレーニング・スクール 地球市民ジュニアとともに」

【司会】

定刻でございます。

ただ今より、第2回青森県人づくり戦略推進会議を開催いたします。

最初に、工藤健様から、「ジュニア・グローバル・トレーニング・スクール 地球市民ジュニアとともに」と題しまして御講演をいただきます。

工藤様は、株式会社成田本店の総務部長をなされておられますが、その一方で、国際交流事業などの

企画運営を通して、子どもたちの健全育成、まちづくりなどに寄与する活動を実施しておりますNPO法人ジュニア・グローバル・トレーニング・スクールの理事長として御活躍されておられます。

また、青森市新町商店街振興組合青年部長を務められ、地域づくりの担い手として、地域の活性化のための様々な活動に御活躍されておられます。

本日は、ジュニア・グローバル・トレーニング・スクールにおける活動を通じた「あおもりの未来をつくる人財の育成」についてお話をいただければと思っております。

それでは工藤様、よろしく願いを致します。

【工藤 健氏】

皆さん、こんにちは。

ジュニア・グローバル・トレーニング・スクール、ちょっと長い名前なんですけれども、理事長をしております工藤と言います。

JGTSは国際交流の団体です。一昨年の12月に独立行政法人国際交流基金というところから「地球市民賞」という賞をいただきました。国内で3つの団体にとということで、ありがたくいただきました。

その時にまとめたDVDがあります。5分ほどですので、それを皆さんに先に見ていただきたいと思います。

<DVD開始>

<映像とナレーション>

ジャパン・ファンデーションは、近年、国際交流の多様化や地域の変革、活性化につながる活動が増えてきていることから、昨年度より名称を地球市民賞と改め、さらなる国際文化交流の振興を願い、地域における国際相互理解と友好親善に貢献された団体、及び個人に授与することになりました。

今年度は青森県のジュニア・グローバル・トレーニング・スクール実行委員会、東京都の特定非営利活動法人多文化共生センター東京、京都府の特定非営利活動法人ジャパン・コンテンポラリーダンスネットワーク、以上3つの団体に贈られることになりました。

青森市は、昔より、本州と北海道を結ぶ玄関口として栄えてきました。国際交流体験を通じて地球市民ジュニアの育成を目的とし、ジュニア・グローバル・トレーニング・スクール、JGTSは1980年設立されました。

その活動は、毎年8月、日本・アメリカと韓国・ロシア・中国など、海外の小学生合わせて100人が青森市に集まり、3日間共同生活を送ります。様々な国籍の子どもたちが2～3名1組となり、ものづくりやレクリエーションを通して積極的にコミュニケーションを図る機会となっています。

<副実行委員長 神 慶太さん> Q活動の経緯について

青森県の中に三沢基地という米軍基地があるのですが、その米軍基地の子どもたちと交流できないだろうかと打診したところ、喜んで参加させて貰いたいという言葉があったので、どんどんその輪が広がって、青森空港が国際空港になるよ、韓国便が飛びます、ロシア便が飛びますということになった時に、じゃあいろんな子どもたちともっと交流できたら面白くなるだろうと。

<青森県知事 三村 申吾> Q交流に参加した子どもたちに

いい意味でのコスモポリタンというか、地球は丸くて、その中でいろんな国があるけれども、そこで

地球を大切にしながら生きていく気持ちは一つと言うのかな、そんなことをお互いに関心を持ってもらえたら素晴らしいと思いますね。

<実行委員長 工藤 健氏> Q参加した子どもたちの反応は？

これから子どもたちもどんどん大きくなるにしたがって、国際社会に飛び出ていく人間になっていただこうと。2泊3日の中でも、最初はやはりお互いに牽制し合っていて緊張をしている状態ですが、ゲームとかコミュニケーションをいろいろと取っていくうちに、だんだん解け出して行って、もう2日目は一緒に遊んでいます。それは言葉が通じる、通じないは別にして一緒に遊ぶ。2日目の夜のねぶた祭りになると、もう子どもたちはお互いに肩を組んで一緒にねぶたに参加しているという状況です。

子どもたちのコミュニケーション力と言うのですが、それは大したものだと思っています。

<イエフスティグネエフ・パヴェルくん(ロシア)> Q参加した感想

言葉が違っていても、韓国、アメリカ、日本の子どもたちと一緒にすることができて、とても楽しかった。

<パク・ヘリンさん(韓国)> Q参加した感想

日本人の方は、とっても親切で、ちょっとしたことでも感謝してくれるのがうれしいです。

<神 太成くん(日本)> Q参加した感想

2日くらい経つてくると、言葉はまだ分からないけれども何を言っているのか大体分かってきて、友達も増えて、遊んでとても楽しかったです。

<トルストグーゾワ・エレナさん(ボランティア通訳)> Q交流の場で学んだこと

子どもたちなので、お互いの文化、分からないこと、習慣とか分からないところもあったので、やっぱり勘違いとか、そういうのもあったし、あと私自身も言葉で分からないところもあったのですが、でもそういうところがあったからこそ、自分は直したいということが沢山出てきました。

<実行委員長 工藤 健氏> Q交流の意義について

やっぱり、言葉での意志の疎通がなかなか難しいのですが、本当に伝えたいことというのはきちんと伝わっているんだと。これを、ある女の子が、「心の交流ができた」と。気持ちと気持ちの中で流れるものが一緒になる。それは表面的な肩を組んだりということ以上に、お互いに深いコミュニケーションが生まれ得る。それで心の交流ができるような体験をして欲しいと思います。

<映像とナレーション>

3日間という短いながらも心の交流ができるこの活動は、地元の自治団体、企業など、地域ぐるみで支援されています。そしてこれを機会に、子どもたちやボランティアの青少年が地球市民に育っていく活動であると大きな期待が掛けられています。

<DVD終わり>

【工藤 健氏】 パワーポイントによる画像をスクリーンに映しながら説明

これは元々青森青年会議所の青少年育成のための事業だったのですが、途中から外部の人達を沢山人

れまして、実行委員会形式になりました。

5年前に青年会議所を独立して、OBが中心になって任意団体を創りました。晴れて、地球市民賞を取ったのもあったのですが、去年の3月にNPO法人を設立し、今年NPO法人になって2年目の事業になります。

事業の紹介を簡単にしますと、夏休みのねぶたの時期に2泊3日の国際交流スクールを行います。大体、この数年、浦町小学校さんをお借りしているのですが、参加する子どもたちは東青地区の小学生の高学年、三沢基地のアメリカの子どもたち、韓国ピョンテク市の子どもたち、あとは中国大連の子どもたちが去年から参加しています。その前はロシアのハバロフスクの子どもたちとか、モンゴルからも来たことがあります。

カリキュラムは2泊3日で、開校式の後コミュニケーションゲームをしたり、海水浴に行ったり。青森ねぶた祭りがメインなのですが、グループを作って、そのグループの中に4つの国が混在で入りまして、日本の子どもと外国の子どもが1対1のパートナーを組みます。2泊3日の間、ずっとその外国の子どもと手を繋いで過ごします。それはそれで最初言葉が通じなかったり大変なのですが、2日目の午後になると吹っ飛んでしましまして、手を繋いで、肩を組んで、言葉は通じていないと思うのですが、意思の疎通はできていると、そういう光景があります。

1日目の夜はウエルカムで宵宮をボランティアが作りまして、その中で日本文化を楽しんで貰うというような工夫もしております。

主役は小学生ですが、これを支えているのはボランティアの皆さんです。大体60名~70名いるのですが、その8割は高校生と大学生です。本番は夏休みですが、4月から運営会議というのを月2回ほど開催し、皆さん、その運営会議に参加していただく。我々がほとんど事務局的なことをやりますけれども、学生の皆さんのいろんな意見を入れて、それで形にしてこの事業を作っていく。

皆さんに報告書をお渡ししていると思いますが、こんなにカラフルで、これを見ただけで楽しさが伝わるというのも、これも全て学生の皆さんのアイデアが100パーセント活きているからです。実は青年会議所時代の報告書は白黒で、全て文章で写真がほとんどないというものだったのが、やはり若い皆さんのいろんなアイデアを入れるとこういう形になるということです。

これがおやつタイム。4つの国の子どもたちがそれぞれの国のおやつを持ってきて、途中でおやつタイムをやるんです。そういういろんなカリキュラムを入れております。

あと、こちらがボランティアですが、この方々は中国から来ている留学生です。ボランティアの皆さんも、いろんな形で参画してくれています。

これ以外にも、夏休みに入る前に国際世界を考えようというので、貿易ゲームというのを子どもたちを集めてやっています。あるいは、国際理解講座として、これは中国の交流員のワンさんに来ていただいて、中国の理解講座をしたり、本番が終わった後には新町で、8月にふれあい広場というのがあるのですが、そちらにまた皆、子どもたちもボランティアも集まって、棒パンコーナーを作ったり、あるいは、これは去年の10月ですが、参加した子どもたち・ボランティア、あと三沢の子どもたちファミリーも萱野茶屋に集まりまして、交流会。1年を通じていろんなフォローアップをしております。

この事業の目的には、実は2つの大きな柱があります。先ほど言いました、まず小学生が主役であるということ。小学生にとってこの事業はお祭りなのです。ある意味、目的というのを考えて参加をしているわけではないのです。ワイワイ一緒に遊んだり、最初は意思の疎通がなかなかできないけれども、一緒に時間を過ごす、いろんなことをすることによって、だんだんお互いを認めていく。世界という可能性を感じてもらえればということで、小学生に対してカリキュラムを組んでいます。

もう1つが、支えるボランティアです。これは高校生、大学生の方がほとんどなので、ボランティア

という役割、社会貢献、そういうことを学ぶと共に、やはり国際交流も同時に体験する。高校生にとっての国際交流というのは意外と深く残るものらしく、世界の可能性を感じてくれていると思っています。世界に目を向けるという気持ちを育んでもらっているということです。

事業を通して子どもたちが育っているなということを感じるのが、小学生で参加した子どもたちが高校生になって、ボランティアで参加してくるというケースが今増えてきているということです。高校生から大学生になって、県外に出ても夏休みになると帰ってきて手伝ってくれるんです。

実は、うちのNPOには理事が10人いますけれども、その10人のうち2人は高校生の時から関わった人、もう1人は大学生から関わって、もう既に社会人になっています。ボランティアで一度はまると、ずっとやって下さる方が結構多いです。

小学6年生まで参加できます。ボランティアは大体高校生からで、中学生に関しては受入をしていないのですが、6年生になった子どもが、「来年は参加できないんだね」と寂しそうな顔で言うケースが結構あるので、「中学校の3年間一生懸命勉強をして、高校生になったらボランティアで参加してよ」と言うと、「英語をじゃあ一生懸命勉強するね」と、そういうやり取りがよくあります。

この画面は日本の高校生と韓国的高校生なんですけど、2004年と2005年、韓国のピョンテク市から「高校生の交流をしましょう」ということで、青森から十数人高校生を連れて韓国に行って参りました、約1週間。高校生のこういう交流というのは、やはり驚くぐらい高いレベルの交流になりまして、韓国の方々のホスピタリティーの高さと、あと日本語を勉強している高校生のレベルの高さにはびっくりしました。帰ってきてからもメールのやり取りをしたり、実際に行き来をしたり。韓国的高校生の中の1人はこちらに来たいといい、今、公立大学に来ている学生さんもいます。あるいは東京の日本語学校に来ている学生さんもいます。

参加した日本の子どもも、国際交流の架け橋になりたいと、今年の春に青森市役所に、面接の時にそういったそうなんですけど、無事合格したという子どももいます。あるいはいろんな形で自分に自信を持ったという子どもが多く、ほとんど友達を作れなかった子が「イルカの調教師になるんだ」と、1つの自分の夢を求めてそのような学校に行ったり、あるいは「農業をやりたい」と、地産地消という言葉掲げて農大に行った子もいました。そういう高校生、大学生とは時々会ったり、東京に行った時に一緒に食事をしたりするのですが、本当にボランティアとして汗をかいて一生懸命やってくれた子は、それなりのいろんな形での自信を持って自分の進路に進んでいるなということを感じています。

あと、もう1つこの事業で大事なものは、市民の皆さんの協力です。これは資金的なものもありますが、いろんな形での協賛・協力があります。例えば、場所が小学校で冷房がありませんので、冷たい飲み物とかを協賛してくれる方はもちろんですが、それ以外にもお医者さんの方が薬をきちんと準備してくれたり、「何かあったら電話して」と携帯電話の番号を教えてくれたり、あるいは趣旨に賛同していただいて、少なくともはお金を寄付をしていただいたり、そういう方々に支えられています。あるいは、例えば食事一つ、200人分のカレーライスを作るにしても、このカレーライスの米はお米屋さんが協賛してくれて、その米を炊くというのもこれまた大変なことなのですが、これは中華料理店の方が三升炊きの大きい炊飯器があるんだそうですね、それを何回か回して米を炊いてくれて、学校の家庭科室ではPTAとかその子どもの親御さんが、お母さんが集まってカレーライス、シチューを作ってくれたり。そういうふうに、皆さんいろんな形で手伝ってくれています。幼稚園の園長さんは、韓国の子どもたちを空港まで送るために、その幼稚園のバスを自分で運転して送ってくれたり、それらに支えられて、今までこの事業をやってきたのかなと思っています。

これは1年目の韓国です。2年目の日本と韓国的高校生の交流です。この時には松山と姫路からも高校生が来まして、こんな人数になっています。

この事業への反響ですが、日本の子どもたちは60名~70名で、往復八ガキで応募いただきます。ただ、どうしても定員の倍近い応募がありまして、泣く泣く抽選になります。保護者からいろんな声をいただいております。「この事業に参加した後、新聞とかテレビで外国のニュースが入ると興味を持って見るようになった」とか、あるいは「小学生のうちに英検の試験を受ける」と勉強をした子もいるそうです。「高校生になったらボランティアになって参加します」と張り切っている子もいるし、先生から聞いた話ですと、おとなしくて友達ができなかった子が、この報告書を持って歩いて、いろんな友達に見せて、楽しかった様子を明るく伝えている姿を見てびっくりしたとか。いろんな形で、この事業によって子どもたちが影響を受けているということを本当に肌を感じています。

何よりもやはり2日目の夜のねぶたが一つのメインであり、お祭りとしては最高のカリキュラムの一つです。青森青年会議所のねぶたにいつも参加させていただいています。背負い笠とお揃いの半天を着て、ハチマキとうちわを作って参加するのですが、皆、声を張り上げて、汗を飛ばして跳ねています。やはり、日本の子どももそうですが、外国の子どもたちにしても、とてもエキサイティングでエキゾチックで、とんでもないお祭りのようで、この後小学校に歩いて帰るのですが、帰ってからなかなか興奮が冷めない。この後、寝るまで私達がついているのですが、大分遅くまで起きているということがあります。

三沢のファミリーの方々も、ずっとお手伝いをしてくれるんですね、この期間、ボランティアの中に混じって。これは一昨年ですが、最後、閉校式が終わった後に、アメリカのお父さんが1人近寄ってきまして、「とても素晴らしい事業ですね」と言い、名刺を頂いたのですが、三沢基地の副指令でした。お父さんとして3日間ずっと一緒について下さったということもありまして、とてもびっくりいたしました。

この事業を通じて感じていることは3つあります。まず1つ、青少年が実際に体験を通して得るもの、それは自信と価値観なんだというふうに思っています。地球市民という表現があるのですが、宇宙に浮かぶこの青いマープルのような地球。この中に全ての人々が暮らしているという価値観です、地球市民というのは、その1つの地球という共通の意識の下に、お互いに思いやりですとか、いろんな尊重し合って支えていこうという、そういう目的の下に地球市民として自分に何ができるかというのを考えようというのが地球市民という定義ですが、子どもたちはそういう意味では地球市民ジュニアだというふうに私達は言っています。差別も偏見もない、まだ感覚です。そのうちに実際に外国の子どもたちと接する。それで得られるものは世界は広いんだと、でも同じ人間なんだよねということが3日間を通して子どもたちに伝わるものだと思っています。

2つ目は、言葉が伝わらない、相手が何を言っているのか分からない、そういうコミュニケーションが取りづらかった一番最初が、2日、3日となってきましたと、最後にはもう別れを惜しんで涙を流すぐらいの、そういう関係になっている、これも素晴らしいことだと思うのです。

それともう1つは、ボランティアの皆さんです。運営を支えているボランティアの皆さんが、暑い夏の中、汗をかきながら2泊3日頑張ります。ボランティアの皆さんが一生懸命関わって運営をしていることを、実は小さな小学生が見ているんですね、その活動を。それが高校生になったらボランティアになりたいということにもつながってくるんです。これは、ある意味では子が親を見て育つ、親が子を見て育つということにも通じるのではないかと思っています。

この事業に関わって今年で14年目ですが、子どもたちの、青少年の育成ということに何故か関わる事が多くて、自分の子どももまだ小学生と中学生だということもあるのですが、実はPTAの方も小学校・中学校とやらせていただいています。また、仕事の関係で、万引き防止について、いろんなお話を家庭裁判所に行ってお話をしたり、あるいは中学校に行ってお話をしたりもしています。

そうした中で、私なりに感じているのは、どんな子どもにも可能性はあります。その可能性の芽を摘むのも、育てるのも、やはり周囲にいる大人です。大人と保護者の方だとつくづく思います。

自分の親や大人を見て子どもは育っていますので、大事なのは、親が自信がないから子どもに言えないとか、そういうことではないと思います。自分のことを棚に上げて言ってもいいと思います。伝えるべきものは伝えなければならないと。大切なことは、言い続けること、相手に伝えることが一番大事だと思っています。

あと、子どもたちと話をすると、どうしようもないこととか、仕方がないことということに意外とこだわります。でも、それはその時点での可能性を自分で摘んでいるわけですので、今できる一步をやるよと。ハチドリの一滴という話があります。皆さん御存じだと思いますが、「とにかく今自分にできることをしよう」と、これが全ての一步だと思しますので、そういう話もしています。

また、よく話をするのは、私も最近これを分かったのですが、日本の食糧自給率が39パーセントと。そういう中で、青森県の最新の食糧自給率が118パーセントある。これは「青森県ってすごい所だね」と。118パーセントの中身も、お米や野菜、果物、魚、そういうものを全てバランスよくあるし、それにちょっと寒い青森の気候の分農薬を使わなくて済むと。暖かい所の何分の1かの農薬ですむとか。そういう良さが沢山あるんだよということを、意外と知らない人が多くて、これはお酒を飲んで友人に話をしたり、あるいは子どもに話をすると、「すごいだね」と、改めてびっくりするケースが多い。特に子どもの場合は、「青森県ってすごいんだ」と、素直なことを言います。ですので、こういうことも一つの自信になるとは思うのです。

あるいは、「街中(まちなか)マーケティング」という市民委員会をやっていまして、街中の良さを、生活価値を皆で探り出そうと、そういう活動をしています。これは無い物ねだりをしてもしようもないので、いろんな方と話をして、街中に住んで、あるいは街中で働いて、街中を使って買い物をして、いいことを挙げて下さいということで、いろんな所でいろんな茶話会を繰り返して、街中の良さ、価値を今一生懸命集めているところです。

あと、これは商店街でやっている活動で、「青森春フェスティバル」というのがありますが、今年3年目になりますが、これは商業者が中心になって立ち上げた祭りです。ゴールデンウィークにある春フェスティバル。ねぶたとヨサコイのコラボレーションですが、今年3年目で15万人の方々に来ていただいています。こういうのも全て自らやることによって自信が生まれるということになると思います。私達が探し出す自信というのは、やはり子どもたちのために生きていくと思います。食糧自給率も街中の良さの発見も、祭りを育てることも、全て子どもたちの時代に引き継がれていくと思いますので、大人が自信を持つというのはとても大事なことだと思います。

最後になりますが、今月の12日に中国の四川省で地震がありました。沢山の方が亡くなって、今も多くの行方不明の方がいます。19日の毎日新聞の1面にこういう写真が載っています。中学生なのですが、授業中だったのですね、手の中にはペンを握りしめている。あと、14日付けの朝日新聞にも、1枚の写真と記事が載っていました。写真は、これは中学生なのですが、亡くなった中学生の手を両親の方が握りしめている写真ですね。ちょうどこの新聞の裏面にはこういう記事が載っています。「希望を失う若者達」。

ジュニアグローバルの活動を通して、子どもたちにはいつもこういうふうに言っています。「私達の住む社会は世界につながっている。全ての人達が笑って手を繋いで、言葉と文化の違いを越えてお互いを理解するように努力することが大事ですよ。自分と自分以外の人達を認めて尊重する、その大切さを学んで下さい」ということを言っています。

本来であれば大きくなるまでしっかりつながれていかなければならない手なのですがけれども、私達大

人が子どもたちに伝えるべきものというのは、それは自信と希望なのだと思います。

これが最後の閉校式の時の写真です。これをあとに子どもたちはまた各国に散らばっていきますが、またきっと何年後には集まって、いろんな形で交流ができるんだろうと今考えております。

時間をちょっと過ぎましたが、御静聴ありがとうございました。

【司会】

工藤様、大変どうもありがとうございました。

今後ともジュニア・グローバル・トレーニング・スクールの取組、それから地域活性化の取組がますます発展しますことを御期待申し上げております。また、人財育成に関しまして、引き続き御支援・御協力を賜りますよう、よろしく願いをいたします。

なお、工藤様には、この後も引き続き会議に御出席いただくことになっておりますので、御質問等ございましたら、後ほどの意見交換の際にお願いをいたします。

ありがとうございました。

2 人づくり戦略関連事業体系等について

【司会】

それでは続きまして、人づくり戦略関係事業の体系等について御説明をいたします。事務局から説明をいたします。

【事務局】

企画政策部の石崎と申します。私から資料1に基づいて説明します。資料1は、一覧性は高いが、その分、大変細かい字になっているので、御容赦いただきたい。

この資料は、平成20年度の県の事業を基本目標や取組戦略ごとに体系的に示し、整理したものである。左の方が大きいカテゴリーで、右の方に青森県の実際の具体事業が記載されている。それがどのように分類され、どのようにぶら下がっているかということが示されている。

まず、基本理念、「ふるさとあおもりを愛し、ふるさとあおもりの元気をつくる人財の育成」に基づいて2つの基本目標と取組を推進するための仕組みづくりが掲げられており、取組戦略については、基本目標にそれぞれ3つと、仕組みづくりの分の4つを含めて10定めている。

1枚目の右側、実施事業の名称を青、赤、黒と色分けしているが、これは予算上の経費区分の違いであり、青は、平成20年度予算において「ステップアップ青森推進重点事業」、つまり、今年度新たに重点事業として取り上げた事業である。赤は、平成19年度予算において重点とされた事業で、20年度も継続しているという事業である。それから黒は、重点事業経費の枠以外の事業、いわゆる一般の政策経費による事業である。

次に、人づくり戦略に係る県の平成20年度の事業の計上状況であるが、事業数で111件、予算額では8億1900万円を計上している。2枚目の枠の外に事業数、予算額を記載しているが、その左側にある事業数、予算額が今申し上げた数字である。

2つの基本目標と取組を推進するための仕組みづくりにおける事業の計上状況をそれぞれ見てみると、まず1ページ目の左上の「あおもりの未来をつくる人財の育成」では3つの取組戦略において事業数で56、予算額で4億1200万円と、どちらも全体の半分以上を占める事業を計上している。ここでは、戦略で最重点として早期に推進することとしている地域ぐるみの生きること、働くことについて考える学習活動、いわゆるキャリア教育の推進について多く計上している。

次に、中段の「あおもりの今をつくる人財の育成」では、3つの取組戦略において事業数で42、予算額で3億6400万円の事業を計上しており、全体の4割前後を占める状況である。ここでは、本県の重要課題の一つである産業・雇用を支えるチャレンジ精神に満ちた地域産業の担い手の育成にむけた取組への計上が多くなっている。

最後に、2ページ目の「取組を推進するための仕組みづくり」では、4つの取組戦略について13件、4400万円の事業を計上している。ここでは、関係主体の連携による継続的な人財育成の取組が可能となるよう、その仕組みづくりに向けた取組が多くを占めている。

以上が「あおもりを愛する人づくり戦略」の関連事業の体系とその概要である。

最後に、この場を借りて2つの事業について紹介をさせていただく。

1つ目は、「あおもりの未来を拓く人づくりフォーラム」。テレビでお馴染みの寺島実郎、財団法人日本総合研究所会長の講演等がメニューとなっているもので、より多くの方々に人財育成に対する理解を深めていただくために、県民の皆さんを対象としたフォーラムを開催するもの。来る6月10日、青森国際ホテルで、寺島実郎氏を迎えての講演と寺島氏と同研究所理事長の野田一夫氏、知事の三者による「地域を元気にする人づくり」と題した鼎談(ていだん)を予定している。参加は無料。是非皆様も含め、周りの方々についても呼びかけをお願いしたい。

2つ目は、「あおもり立志挑戦塾」。本県の経済や地域づくりを牽引していけるような気概やチャレンジ精神、発想力、行動力、視野を備えた人財の育成と、これらの人財により構成されるネットワークの形成を目的として、県内在住の若手中堅層を対象とした20人程度の少数精鋭による塾を開催する。塾長は、今申し上げました鼎談に登場する日本総合研究所理事長の野田一夫氏。この方は多摩大学の名誉学長でもある。この方を塾長として、半年にわたって塾が都合6回展開されるということ。6月20日までに塾生を募集しており、塾長による面接を経て、7月上旬に塾生を決定し、7月19日に予定している開塾日を皮切りとして、12月中旬までの約半年間にわたり開塾予定である。所属の団体の若手中堅層の方々の積極的な応募を、今日お集まりの皆様には是非働き掛けをしていただき、1人でも将来のリーダーとして育てていけるような方々をどんどん御推挙いただきたい。

【司会】

ありがとうございました。

以上をもちまして、第1部を終了させていただきます。

引き続きまして第2部へ移らせていただきます。

(知事、教育長入室)

第2部

【司会】

それでは第2部を開始いたします。

三村知事より御挨拶を申し上げます。

1 知事あいさつ

【知事】

大変大事なこの人づくり戦略推進会議に遅れてまいりましたことを一言お詫び申し上げます。

さて、本日はお忙しい中、第2回青森県人づくり戦略推進会議に御出席を賜り、まことにありがとうございます。

皆様方には常日頃から県政全般にわたりまして格別の御理解と御協力をいただいております。心から感謝を申し上げます。先ほど御講演を下さいましたNPO法人ジュニア・グローバル・トレーニング・スクール理事長の工藤様におかれましては、大変に御多忙のこの時期でございます。御講演をお引き受け下さいました。厚く御礼を申し上げます。ありがとうございました。

さて、私も青森県を取りまく社会経済環境が大きく変化をしている中で、青森県が持つ可能性をさらに引き出し、未来を確かなものとしていくためには自主自立の青森県づくりを進めていくことが何よりも大切であると考えます。

このため、県ではこれまで行財政改革や重点推進プロジェクトを始めとする様々な施策に取り組んできました。そしてこれからは、これまでの取組の種を元気に芽吹かせ、着実に育み、結実させることによって暮らしやすさではどこにも負けない生活創造社会を創り上げていきたいと考えております。

また、自主自立の青森県づくりを進めていく上で最も基本となりますのは人財であります。この人財の育成こそが未来の青森県づくりの基盤として取り組むべき最大の責務であると私は考えています。

そのため、昨年9月に各分野の課題に果敢に挑戦するチャレンジ精神あふれる人財の育成を狙いといたしました「あおもりを愛する人づくり戦略」を策定し、人財の育成に向けた取組を戦略的かつ継続的に推進をいたしております。ただ今、次長の石崎の方からもお話があったと思います。

さて、この人づくり戦略に掲げます基本目標を達成するためには、教育界・産業界・地域・行政など、関係者の皆様方が一体となりまして中・長期的な視点に立って人財育成の取組を一步一步着実に進めていくことが大切と考えます。

何とぞ御参集の皆様方におかれましては、幅広く意見交換をしながら人財育成の思いや認識を一層深められますと共に、各団体における取組の充実に向けて今後とも御尽力を賜りますようお願いを申し上げます。御挨拶といたします。

本日はよろしく願いいたします。

2 議事

【司会】

それでは引き続き会議を進めてまいります。なお、本会議の設置要綱において、会議の議長は知事が務めることとなっておりますので、ここからの議事進行は知事が議長となり進めてまいります。よろしく願いいたします。

(1) 部会の設置について

【知事】

それでは私が議長を務めさせていただきます。次第に従って議事を進めてまいりたいと思います。

最初に、部会の設置ということにつきまして、事務局から説明をさせます。事務局、お願いします。

【事務局】

資料2を御覧いただきたい。今、知事からお話があったとおり、「青森県人づくり戦略推進会議」に部会を設置したいということである。

1の主旨から御覧いただきたい。平成19年11月に、人づくり戦略に掲げる産学官金融の連携の仕組

みづくりについて、県内企業の人財育成の意識等に関するアンケート調査を実施した。その結果、多くの企業が人財育成の重要性を認識し、何らかの人財育成に支援をしたいという意向を持っているにも関わらず、現在の企業にはなかなかその力が無く、景気回復、雇用の場の確保など基礎的部分の改善を優先せざるを得ないなど、人財育成を進める上でいくつかの課題が判明している。

これらの課題解決に向け、既存の機能の再建等を含め課題解決のための取組や仕組みづくりについて、関係部局、関係機関、外部有識者などを交えた機関を設置して検討をすることが必要と考えた。人財育成に係る取組を進めるにあたっては、関係主体との連携を深めながら実施することが大切との考えから、人づくり戦略に基づく取組の効果的な推進を目的として設置された「青森県人づくり戦略推進会議」、まさにこの会議を活用するのが適切と考えた。ここで御理解を得られたら、設置要綱を改正して部会設置の進めたいと考えている。

2番は、設置する部会の種類である。当面は産学官金融連携促進検討部会、その1部会としたい。今後、他分野における部会等の設置の必要性が生じた場合でも、それに対応できるように設置要綱上は複数の部会が設置できるような規定としたいということである。要するに、1部会だけではなくて、必要に応じて部会を設けることができるという文章にしたいということである。

3番は、産学官金融連携促進検討部会の役割、構成等である。役割としては、人財育成に係る産学官金融の連携の仕組みづくりに向けて、アンケート調査から得られた成果、抽出された課題に基づき、その解決の為の取組や仕組みづくりについて、既存の機能の再建等を含めていろいろと検討していきたい。構成としては、関係機関、有識者等から5名程度と、私ども県の関係部局から構成したい。検討内容を例示的に示せば、企業における人財育成の課題、アンケート等も出ているが、それを少し分析をしたい。それから、課題をどうやったら解決できるかということに向けての取り組むべき内容、そして企業も参加しやすい産学官金融の連携の仕組みとその機能、こういったところが検討内容になるのではないかと考えている。

最後に4の今後のスケジュールであるが、推進会議での御理解が得られれば、部会委員を選任して、7月にも第1回部会を開催していければと考えている。なお、先ほど申し上げた県内企業の人財育成の意識等に関するアンケート調査については、この部会で一定程度分析等を踏まえて皆様にも一応の形作りをした上でお示しをしたいと考えている。

【知事】

ただ今、事務局の方から説明をさせましたが、産学官金融の連携が必要との観点から、本会議に部会を設置できるようにしたいということであります。人財育成に関しましては、皆さんの意見を踏まえながら一緒に連携をして取り組んでいきたいとの観点から、設置要綱の改正について皆様方に御報告を申し上げ、御理解をいただきたいという私どもの主旨でございます。

いかがでございでしょうか。連携をより強めていくためにも、このような方向で進めることに御賛同いただけませんか、というよりも何か御意見等いただければと思う次第でございます。

お願いします。

【青森県漁業協同組合連合会 総務部長 蛸名 正充氏】

本日は2回目の推進会議ということですが、実は私、初めて来まして、内容を知ったところでございます。

推進会議の下部に部会を設けるとなると、もし選ばればその組織の人間が部会に参加していくということになるわけですが、その選ばれた時に、この推進会議そのものの組織体制、これはメンバーを見

るとある程度トップクラスの人になっているわけですが、そうすると、部会というのはせいぜいその下の職員なりが、管理職なりになるという考え方をするのでしょうか、その辺の考え方を聞きたいと思えます。

【知事】

事務局からお話させます。

【事務局】

今申し上げたように5名程度ということで、推進会議のメンバーからも一定程度参画をいただける分野もあるのかなと考えている。もう一つ、外部からもどうかなと考えている。

例えば、具体的に企業で人財育成に取り組んでいる会社の人事担当の方とか、そういったところ。あるいは、いわゆる学識者の中でもキャリア教育といった方面に詳しい大学の先生とか、そういうところの知見も得たい。この部会では、皆様にそういった様々な課題なり、それに対する解決方策を示していければということ。そういう意味での部会の設置を今のところイメージしている。

【知事】

という内容でございます。

【青森県漁業協同組合連合会 総務部長 蛭名 正充氏】

分かりました。

【知事】

その他、御意見、御質問等ございませんでしょうか。
佐々木先生。

【青森公立大学 学長 佐々木 恒男氏】

青森公立大学の佐々木でございます。

今、いろんな連携の取組が行われていて、連携ばやりと言いますか、産官学金、実はその後に公、産官学金公というのが今の連携の枠組みです。

大事なことは、連携を作って、いつまでに何をやるのかという課題と時間設定を必ずやって欲しいということ。そうでないと、協定書を結んでお終いということになる。そういう形骸化した連携というのはほとんど意味がないので、もしこの人財育成の仕組みづくりですか、ということであれば、いつまでに仕上げるのか、これを出発の時点で必ず明記しておいて欲しいというお願いでございます。

【知事】

大変重要な御指摘をいただいたと思っております。私どもといたしましても、この課題と、いつまでに課題に対してどういう答えを出すかということをしかりと事務局等を含めましてお示ししていく、その方向で進めたいと思えます。

ありがとうございます。

その他、何か御意見等、ございませんでしょうか。

それではお諮りいたしますが、産学官金融連携という部分につきまして、部会を設けるという方向性
でよろしゅうございましょうか。

ありがとうございます。御賛同いただいたものとして進めさせていただきます。

それでは事務局としてはいただいた御意見等をしっかりとまた対応するよう私からも強くこれを指示
いたします。

(2) 意見交換及び情報交換

【知事】

それでは議事の2、意見交換及び情報交換に移らせていただきます。これからはせっかくのこの貴
重なお時間を、それぞれの分野でお忙しい皆様方に御参集いただきました。何とぞお考えになっている
思いと言いましょか、この人財育成についての意見交換、情報交換を行いたいと思います。人財育成
につきましては各団体においても、これまでそれぞれに様々な取組を進めてきておいでと思いますが、
例えば、取組を進めていく上でこういった課題があったんですよとか、あるいは今後私どもの団体では
こういった方向を考えていますよと、そういった各団体の取組状況等についての御発言、あるいは皆様
方それぞれ個人的にでもよろしゅうございます、お考えになっておりますこの人づくり、人財育成とい
うことにつきましてのお考えなど、御発言をいただきたいと思っております。

例えば、第1部で子どもたちを対象とした基調講演がございましたので、その関連でも結構ござい
ますし、また私ども「あおもり立志挑戦塾」というものを今後進めるわけでございますが、そういった
取組に対して、あるいは皆様方の中でそういった取組等進めていることがあるぞと、そういった情報提
供でも構いません。何とぞ、せっかくの機会でございますので、御発言いただければ有難く思います。
御指名するのでもあれでございます。どなたか最初にお話を思い切っていただければと思うのですが。

では遠慮無く御指名をさせていただいて。目が合いましたので、あおもりNPOサポートセンターか
ら一言お願いいたします。

【特定非営利活動法人あおもりNPOサポートセンター 理事長 田中 弘子氏】

あおもりNPOサポートセンターの田中です。

先日は四谷のおもちゃ美術館で、青森県の木工の方達の「わらはんど」が出しているコーナーが沢山
あって、それと子どもたちが沢山面白い笑顔で遊んでいるのを知事も御覧になり、知事の御挨拶も木の
ネクタイも大変良かったと思っております。あそこは、廃校を利用しておりました。今、課題になっ
ているのは廃校の活用の仕方だと思います。廃校をうまく活用をしている宮古市なども活用プロジェクト
に入っています。

そして、あおもりNPOサポートセンターでも、浪岡の小学校の廃校を利用してプロジェクトをスタ
ートします。青森県にはアートやものづくりや、ものすごい、最高に面白い方々が沢山います。それぞ
れ持っている才能をこの廃校に活かしていくと、とても面白い、祭りと同じような面白いものができる
と思って、今、取組をするというところにあります。

それと併行して、青森を団塊世代の方がちょっと面白いなと思って下さって、口コミで青森県を広げ
ていくことはとても大事だと思います。お祭りだけではなくて。青い森って、私、すごい素敵な言葉だ
と思います。その青い森を団塊世代の方達のセカンドライフの場にしていけたらということで、それも
今回、取り組みますが、その中でプチコンシェルジュ、プチコンという青森県の皆さんとお会いした時
に、「えー、こんなにも『思い道』を、お金ではなくて、本当にやろうとしている、青森県にこんな人財
がいたのか」というくらいすごいメンバー達が産官学で集まっている。こういう取組をやり始めていま

す。

他の団体の方々もいろいろ情報があるようで、知っているようで知りませんので、こういう情報を皆さんと共有して、本当にできるところからどんどん行動を起こしていく。調査とかもとても大事なんですが、まず行動を起こしていくというところから始めていけば、それにつながっている、後ろにあるその方達のネットワークが自然とついてきますので、そういう戦略作りをしていけば大きくなっていくのではないかと思います。

【知事】

大変ありがとうございます。

行動を起こしていくということ、そしてまた情報の交換が非常に大事だということのお話等をいただきました。

若干補わせていただきますが、東京の四谷三丁目の地下鉄の駅のすぐ傍に四谷第一小学校という学校がございました。ございましたと言うのは、廃校になりました、ああいう地区でございますから。そこにおもちゃの美術館というものを造ろうという運動が起きまして、何か子どもたちが遊べるような仕組み、施設というものを造ろうと。半分位を私ども青森県の「わらはんど」という方々が受注しまして、青森の素材を使いながら造りました。彼らは青森県内で木のおもちゃを作っておりまして、そういったおもちゃも相当数入れました。その運営もまた地元、新宿区というような区立ではなくて、それぞれ応援団、まさにNPOの方々が力を出し合っている形で進んでいます。私ども青森の持っている人財、ただ今、田中さんから話があったのですが、本当にアートとか木工とか、奈良美智さんを始めとして、そういった青森の木工アーティストの方達が集まって本当にいいものを造りました。東京に行く機会がございましたら、地下鉄の四谷三丁目でJALシティーというホテルの裏で日中やっておりますので、御覧いただければと思います。青森の人財力というものが大変に大きく発揮されたということが御理解いただけることをやっておりました。

今、廃校の利用等ということで話がありましたので、廃校、空き教室の利用ということになりますと柏農校。実は柏農校で、今、県の制度でございますけれども、職員のベンチャー制度というのがございます。初めて学校の先生と子どもたちと言うか高校生がこの制度に応募してきてまして、非常に画期的だったものですから、私どもとしてこれを今進めさせております。空き教室、廃校を利用して野菜を発光ダイオード、光ダイオードで作ろうという試みを行っているのですが、先生の方からいろいろとお話をいただければ。

【青森県高等学校長協会 就職対策委員会副委員長 福土 有一氏】

柏木農業の校長の福土と申します。

今日は青森高校の校長が来るべきところですけども、私、全国大会の方に行きませんでしたので、今日こちらに出席をしました。

今、知事が言われたとおり、本校でちょうどこのベンチャー事業が始まって2年目になります。本校も8クラスあったのですが今は5クラス。今年からまた1クラス減。4学科にいずれなるという学校です。それでまず1つの目標は、発光ダイオードを利用して、空き教室に何とか野菜を作ることができないかと。発光ダイオードというのは電気料が非常に少なくて済み、普通の日光と同じぐらいの成長力があるとされています。

この間、RABやNHKでも公開しました。1年目は外で行いました。プレハブを完全に暗くして発光ダイオードだけで育てました。今は空き教室を利用した野菜室を1つ作っております。大体リーフレ

タスが中心です。それからシソ、ミニトマト、ガーベラという花です。試験場の先生方に毎週1回、課題研究の時間に生徒を指導してもらっております。2週間に1回収穫できます。リーフレタスというのは葉っぱだけのレタスですので、玉にならないレタスで非常に成長が早い。夜昼逆の方法で栽培しています。ちょっと発光ダイオードだけでは電気が足りませんので、ハロゲンランプと発光ダイオードを併用しながら、今は大体2週間に1回のペースでやっております。

それで一番大きな影響を受けたのは、生徒です。生徒の前にテレビカメラが来たり、いろんなものを公開する、それから簡単に2週間ぐらいでリーフレタスが水耕栽培できるということで、非常に生徒が自信を持つようになりました。

私3年目ですが、もっともっと勉強をしたいということで大学に行く生徒も出だし、いわゆる篤農家の息子さんも数は少ないですけども来ていますので、あと10年、15年後には何人かの生徒が立派な農家になってくれると思っております。またそれを信じてやっております。

農業高校は非常に今いい季節になっておりますので、もし時間が許されれば、本校の空き教室を利用した野菜栽培教室の一つ見てもらえればなと思っています。

今年でプロジェクト自体は終わりますけれども、この試みについては、本校の特徴としてしばらくいろんな野菜を繰り返し栽培し、続けさせていくつもりです。

【知事】

実は、この柏農校の試みが、刺激が刺激を呼んでいる。これが人財育成の面白いところだと思う。

十和田工業高校というのが私の生まれの方にあるが、夏場に体育館の中でバレーとかバスケットをやっていると、暑くて、暑くてしょうがない。水を掛けると少し涼しくなるぞ。彼らがそういった考えから、建材メーカーの方々と生徒さんと先生とで連動して、実際に商売になるかならないかは別としても、新素材を創ろうということで、庁内ベンチャーという2年間の制度で応募してきました。

刺激とエネルギー、それが連動していくということを考えているのですが、そういった試みが実は私どもの、いわゆる実業畑の方でも始まってきた。それはひとつの人づくりということでもある。自分達でアイデアを出して、自分達で考えて。県は財源を渡すだけです。財源と権限をチームに渡し、好きにやって下さいという形でやっている。そういうことが始まってきた状況である。

せっかくの機会でございます。その他、何かこの機会に御発言いただければ有難いと思います。

どうぞ、お願いいたします。野田さん。

【青森県PTA連合会 母親委員会委員長 野田 継子氏】

PTAを代表して参っておりますので、そちらの方から一言お話をさせていただきます。

地味なことになりますけれども、子どもたちの基礎学力の定着のためのいろいろな施策が充実されることを非常に希望しております。学校は授業時数も行事もどんどん減っております、子どもたちが実際の体験を積む場所が非常に減っております。ですので、今日お集まりの皆様にも、様々な事業を催す時には是非子どもたちの居場所も含めて事業を創っていただければ子どもたちの実際の体験が積める場所になるのではないかとお願いしたいと思っております。

【知事】

子どもたちにいろんなこと、子どもである時期に経験させたいということで、大変素敵な提案をいただいたと思います。

私どもの教育長が今日見えておりますので、若干お話を。今年もいろいろと教育委員会の方では工夫

をしていております。少しお話をさせていただきます。

【教育長】

貴重な御提言、ありがとうございます。

確かに、子どもたちが、我々の時に比べて体験するということが大変少なくなってまいりました。

私も、今年度から大きい事業をやっておりまして、「あおり未来人学びの力育成事業」はいくつかの事業からなっておりますけれども、その中で「あおりっ子未来夢はぐくみ塾」というのを種差少年自然の家で開催いたします。これは知事からまず開校の御挨拶をいただきながら、子どもたちに語り掛けていただくということからスタートいたしまして、「君に託す青森県の未来」ということでお話いただくわけでございます。その後、やはり交流だとかものづくり、あるいは数学に興味を是非持って貰いたいか、あるいは交流を通して夢を語っていくものです。例えば数学家の秋山仁先生だとか、それから首都大学東京の、東北大学の総長や岩手県立大学の学長をやられた西澤潤一先生をお招きしてお話をいただくということになっております。

様々、そういう機会を捉えまして、子どもたちのモチベーションを高めていく、その中で自分達でもって学んでいこうと、自分達から向かっていくような姿勢を作っていきたいということで、今、取り組んでいるところでございます。

いくつか私どももやっておりますので、こういう機会を通して御助言等をいただければと思っております。よろしく願いいたします。

【知事】

少し補わせていただきました。

その他、せっかくの機会でございますので、いろいろと御意見をいただければと思っております。先生、お願いします。

【社団法人青森県医師会 常任理事 町田 祐子氏】

青森県医師会から参りました町田と申します。

青森県の将来を担う人財を育てる上で、最も重要なことは、やはり人の命の大切さを教えることだと思っております。残念なことに、若年者の自殺や殺人事件などが最近後を絶ちません。よい人財育成のためにも、人の命の尊さや人を大切に思う心を幼少期から育てる教育が最も大切、重要と思っております。

こうした点、医師会では人の命に直接関わる医療だけでなく、看護、介護といった幅広い分野を抱えております。そういう特徴を活かしまして、子どもたちにもっと命の大切さというのを伝えることができるのではないかと考えております。学校との連絡を密にし、今あります学校保健医会や職場体験学習などにもっと積極的に参加し、また地域に密着した診療所が数多くありますので、そういった医師とか看護師と地域の幼稚園児、あるいは小学校・中学校・高校の子どもたちと話し合うとか、素朴な交流なども非常に有効なのではないかと考えます。そういった点でも地道な企画を立てていただければ幸いですと存じます。

また、勤務医不足が言われておりますけれども、医学生は今や3人に1人が女性の時代になってまいりました。女性では、やはり子育てが大きな問題になってまいります。非常に過激な勤務体制の中で医師を続けていくということから、ドロップアウトをする人が増えるのではないかと懸念もされております。

その中で、育児の支援サポートということになりますと、青森県では非常に遅れた状態にあると思いますので、私達医師会の方でも女性医師達のネットワークを構築し、育児のサポート体制づくりに尽力していきたいと思っております。県の方でもどうぞよろしくサポートをお願いいたします。

【知事】

大変ありがとうございました。先生から、命を大切にすることの大切さということ、また女性のお医者さんが増えていくというお話がありました。私自身、毎年、弘前大学に実はスカウトというか、1年生と5年生を対象に懇談会、講演会のために行っておりますが、今年は確かに3分の1でしたが、去年は半分、一昨年は半分がもう合格者が女性、そういう時代になっております。

後半の話からいきますと、私どもワークシェアの体制づくりの仕組み等を含めて、そういった女性医が増えていく中で仕組みづくり、もちろん育児支援サポートのネットワークづくりにつきましても検討をしていきたいと思っております。

また、「命を大切にすることを育む県民運動」ということを、実は長崎の佐世保の事件以来続けておりまして、県内でも千数十団体が参加して下さいます、一つの命、皆の大事な命ということを含め言葉にして、皆で命のことを、特に子どもたちに訴えかける、そういった仕組みづくりということ、地道でございますけれども、活動として続けているという状況でございます。

今、町田先生の方からこういった小・中学校での命に対する取組がどういうものがあるかとか、あるいは先ほど基礎学力等の話もございましたので、池田先生、山田先生の順で何か情報提供をいただければと思っております。

【青森県中学校長会 会長 山田 卓氏】

山田です。

学力に関しては、例えば今、少人数学級ということで、33人学級を実施していますが、その成果が今、大分出てきたのではないかなと思います。今、中学校でいくと1学年だけだが、これが2年生、3年生の方にまでいくと、それこそかなりすばらしい学力がついてくるのではないかなと思う。学力の調査をしても、青森県は非常にいい位置に今いるので、何とか33人学級を伸ばしていただければいいなと思うこと、これが学力に関しての1つです。

もう1つは、昨日、県史編纂の会議に出ましたが、その時に、いろいろなすばらしい資料がいっぱい出てきました。その資料というのは今まで青森県はこうだったという非常にいい部分を表している、それが自信につながるようなものです。先ほどジュニア・グローバル・トレーニング・スクールの工藤さんから、青森県は食糧の自給率が118パーセントだと、そういうことが自信につながるというお話がありました。それと同様に、非常に自信につながる資料があるということです。

それから、今何をすべきか、未来に向かって何をすべきかということで、夢というものをもう少し見ていければいいなと考え、私ども、造道中学校では、知育、徳育、体育の他に食育、プラス夢を育てるということで夢育というものも加えて取り組んでいます。

先日、中学校長会の総会の時に、知事が「青森の正直」というお話をされました。そういう子どもたち、ねばり強く真面目で集中力がある子どもたちを育てていこうということで、今、一生懸命取り組んでいます。これについては、先ほどもお話ししたように少人数学級が非常に効果的です。

【知事】

ありがとうございます。

【青森県小学校長会 青森市立千刈小学校長 池田 好明氏】

小学校長会を代表して。私どもの学校でも少人数というのは非常に助かっております。特に私どもの学校は、普通は1人しか配置しない加配を2人も配置していただいて、大変助かっております。

子どもたちをきめ細かく育てていこうという気運は先生方にも高まっておりますが、やっぱり私はもう少し地域の教育力というのをもっと学校の中に取り入れていくべきではないかなと思っております。今のところ、学校支援ボランティアを組織して、いろんな図書の読み聞かせであるとか、先生方1人でつくよりは2人でついた方がいいだろうと、いろんな校外学習、体験学習が、今、沢山取り入れられてあり、外に出る機会が大変多いので、そういう時に引率のお手伝いをしてもらったりとか、あるいは丸付けをしてもらったりとかする。子どもたちに自分のお父さんやお母さんが学校に来て手伝ってくれている、そういう姿を見せるということが子どもたちの夢をまた育てていくのではないかなと、こう思っております。

ですから、地域と学校が一体となっていけるような仕組みづくりというものをもっとどこかで後押ししてくれるような制度があればいいのではないかと思います。

【知事】

地域の教育力と言うんでしょうか、いろんな形で、実はNPOの方々が地域を支える仕組みづくりをして下さっていると思います。中村さん、急で申し訳ないのですが、何か教育力とか地域に関係しているようなことをなさって下さっているNPOの方々もいらっしゃると思うのですが。では、NPOの立場で、人材育成ということについて。

【特定非営利活動法人NPO推進青森会議 理事長 中村 年春氏】

NPO推進青森会議の中村と言います。前回は所用のため、事務局長を出席させていただきました。今日初めてということで。

私どものNPOは、これはいわゆる中間支援という、いわゆるNPOを育てるためのNPOというのが本来の我々の活動の主旨です。しかし、そうはいえ、やはり社会貢献ですとか、業界の用語でいえばミッションとかゴールとかいろいろあるのですが、そういう中で、最近私どもの推進会議は、やはりそれぞれ県内の地域づくりですとか、あるいはコミュニティービジネス、こういうものに一生懸命関わる、あるいはそういうものを立ち上げようという人達の支援、サポート事業を各地で実施させていただいております。

そういう中で、先般もちょっとしたシンポジウムをやったのですが、全体を見渡すとそういう意味では半分ボランティアに近いような、そういう社会起業家のような人達が随分増えてきたなという印象は持っております、県内に。隣の田中さんが、NPOサポートセンターを立ち上げた時には、NPOという用語すらなかなか県民から理解してもらえなかった。そういう意味では随分環境が変わってきた。ただ、彼らが一樣に言うのは、なかなかまだ地域の人達に理解してもらえないと。何か若い人達が変なことを始めているとよく言われるように、必ず1回は失敗にあう。でも、それでめげているは多分できないので頑張っています、という言葉が大概返ってきます。

ですので、やはりそういう環境づくりは必要かなと。これは我々NPOの活動をしている皆さんもやりますけれども、やっぱりその地域の人達、あるいは行政も含めてもう少し理解が欲しいなと思っております。ただ、非常に今、フォロー風は吹いていると思っておりますので、引き続き暖かい目で見守って欲しいなということがまず第1点です。

それから、今日は久しぶりに工藤さんのお話を伺いさせていただきました。実は私、本業が大学の教員なものですから、非常にコミュニケーション能力の不足を危惧しております、自分のところの本校以外にもいくつかの大学でも教えているんですが、青森県のトップの進学校から来ている学生さんをよく見かけます。1人でポツンとしているんですね。周りの人達と話をするでもないし。もう少し、最近若い人達、場の空気を読むと言いますかね、空気を読むという言葉を使いますが、もう少し皆さんと交流できるような、そういう何て言うかな、県民の性格と言うのかな、そういうのを欲しいなと思います。そうするともっともっと輪が広がって行って、またいろんな活躍の場が出てくるのではないかなと。

先ほど、アートの世界では非常に優秀な人材が沢山出て、世界に誇れるような人達が出ていたと言いましたが、どうも、特に私は大学に関わっていますので、そういう中では知育、体育、徳育、食育も結構なんですけど、もう少し子どもたちのコミュニケーション能力ね、これを育てるような教育も少し力を入れて欲しいなというふうなのが1点あります。

それともう1点は、常々感じているのは、日本の社会全体がそうなんでしょうけれども、人口が高齢化してきたということで、組織の中での重要な意志決定をする、いわゆる管理職と言いますが、この管理職の年齢もかなり高齢化してきています。多分、おそらく日本の社会を平均すると、我々の年代ですと大体大学を卒業して4～5年すれば主任になって、20代の後半か遅くても30年代には係長とか、30代早ければ半ばぐらいで課長ぐらいになって、ある程度の組織の重要な意志決定に参加できる、あるいは決定していった。ところが、今、多分これは10歳以上違ってきていると思います。企業でちょっとした部長はもう50代の半ばです。そこまでなかなか重要な意志決定ができないということは、人が育っていないということです。少なくとも青森県においては、やっぱり組織というもの、少しずつ若返りはしていると思うのですが、そういう重要な意志決定をする部門にやっぱりもう少し若い人達を登用して欲しいなと。県庁がどうかはよく分かりませんが、そうしないとなかなか人は育たない。多少リスクはあるでしょうけれども、そこは目をつぶっていただいて、やはり若い人達を育てる、これは地域もそうですし、組織もそうです。いろんな場面で必要であろうと思っています。

すいません、ちょっと長くなりましたが。

【知事】

大変ありがとうございました。時計を見ないで進行をしまして、終了時間が過ぎているということですが、どうしてもという方、お一人いらっしゃれば、どうしてもと。

お願いします。

【工藤 健氏】

すいません、国際交流と青少年育成の事業をやっているのですが、小学生は取りあえずとして、やはり参画している高校生のボランティアの皆さんが、この体験を通してやはりとても大事な気付きを得て、自分の進路を決めているというケースがかなり多いです。

自発的に参加してくれる子どもと、あとは一緒にくっついてくる子どもたちもいるのですが、意外とくっついてきた子どもの方がずっと長く続けていたり、自分の社会的な役割の中で気付くんだと思うんですけど、自分がやっていることにすごい自信を持ちます。いろんなところに進学をしたり就職をしたりするんですが、働きながら、進学しながらでもまた戻ってくるということは、何か自分の中でこの活動が芯になっていると思います。ボランティアという意味では、各高校さんを回ってボランティアの募集依頼をお願いしているのですが、高校によってはちゃんと担当の先生がいらっしゃるところが意

外と最近増えてきています。そういう意味でも、高校生のボランティア体験というのはやはりちょっと違う体験だと思うんですね、普通の勉強とは。目の当たりにしていますので、そういう可能性もこれからもっとどんどん伸ばしていければと思います。

【知事】

ついてくる子どもの方が長く続けるというのは面白いですね。

すいません、終了時間を伸ばして、私自身が伸ばしてしまいまして申し訳ございませんでした。それでも、どうしてももう一言という方。

田中さん、どうぞ。

【社団法人青森県観光連盟 理事 田中 久美子氏】

取り留めのない話になるのですが、1～2分。

今回開催する野田先生の塾、大変楽しみで、野田塾というのを是非定着させていただきたいということと、それから期間を決めて結果を出すということもすごく大事だと思うのですが、長期的に、例えば地元からいろんなことを発信する教育というのも大事かと思うのです。海外から学ぶことも大事ではないかと思います。ミッションというか、昔の十二少年使節団みたいな。青森県からこれぞと思う人財を、海外のこういうことは研究をして勉強して欲しいという人財を、どんどん海外に出して、何年かその人に投資をする。そして帰ってきて青森県のためになっていただくということを何とかやっていただきたい。長期的な点と短期的な点と、そのことをまずお願いしたいなと思います。

また、青森県は、いろんな科学技術がすごく集大成している土地があるので、科学を愛する子どもたちというか、青森県の子どもたちはすごく科学の面で優れているんだと、そういうような方向付けをしていただきたいなと思います。

それと同時に、もう1つは心の問題だと思うのですが、私自身は中・高カトリックで育ったものから、自然にもうそういうのが入っているのですが、いかに宗教観と言うか、儒教でもいいのですが、大切なものを教える、青森県ではこういうこととこういうことは最低限大切だから、皆で励行していきようという心の問題と学術的な問題とを併行してやっていただきたいなと思います。

あとまた蛇足なんですが、広中平祐先生という方が何度かお泊まりになって、それで自分が教えたいと、数学を。いい場所が無いだろうか、広い場所が無いだろうかと。そういうことを探していらしゃったこともちょっと思い出しました。

以上です。

【知事】

ありがとうございました。大変、もう時間が過ぎてしまいまして申し訳ございませんでした。意見交換の部、これで終わらせていただき、なおかつ事務局の方から何か連絡事項等あれば。

よろしいですか。

それでは私から一言御挨拶を。これから発明協会、工業会の総会に行ってきますので、大変御提案があったこと、非常にいいことだと思っております。

さて、人財の育成ということでございますけれども、一朝一夕にはならないということは誰もが分かることだと思います。しかし、やはりこの時期にきちっとした方向性を示しながら積み上げていくと言ってしまうでしょうか、少しずつでも伝えていく、変わっていく、そのためにもスタートをさせたという思いがございます。中長期的な視点の分野と、そして会議所と経営者協会の方でもお見えでございますけれ

ども、いわゆる今を、この青森県の今を支える人財も含めて、そしてまた未来に向かっていく人財も含めて、ともにこれは併行して育成していくという姿勢、また具体の施策というものが大変重要だと思っております。今後とも皆様方を始めといたしまして、関係団体の皆様方と一緒にチャレンジ精神あふれる人財の育成、そのことに進んでいきたい、そう考えております。

何とぞ今後とも御理解いただき、沢山の場面、場面において皆様方からも人づくりということを常に念頭においた御活動、心からお願い申し上げまして締め御挨拶とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。

【司会】

以上をもちまして、第2回人づくり戦略推進会議を終了いたします。今日はどうもありがとうございました。